

## 【連載】ホブソンの『内科新説』—幕末のイギリス医学にみる呼吸器疾患

Hobson's 『Naika-shin-setsu』 (Practice of medicine and materia medica) — Respiratory diseases found in English medicine of the latest Edo period

## (3) 『内科新説』にみる肺結核

工藤翔二\*

\*公益財団法人結核予防会

鄒大同\*\*

(和訳協力) \*\*イスクラ産業株式会社・中成薬部

## 要旨

江戸時代、西洋医学はオランダから日本にもたらされた。しかし、幕末には英国人医師ベンジャミン・ホブソンによって中国上海で出版された中国語（漢文）の医書が、訓点翻刻（訓読みのための返り点などを付して印刷）されて、『内科新説』という名の医書として日本で普及していた。今回は肺結核について、どのように記述されているかをみることにしたい。和訳は、できるだけ原文（漢文）を残すこととし、鄒大同医師の協力を得た。

**Keywords :** 内科新説, ベンジャミン・ホブソン, 結核, 幕末/NaiKa-Shinsetsu, Benjamin Hobson, tuberculosis, Edo period

(前回からの続き)

## はじめに

『内科新説』は清暦威豊8年（1858年）、上海仁済医館のイギリス人医師、ベンジャミン・ホブソンによって書かれた著書（中文）が、安政6年（1859年）に訓点翻訳され日本で出版されたものである。今回は、『内科新説』の中で「労病」あるいは「労証」と表現されている結核が、どのように記述されているかを、みることにしたい。「労証」は、本書の中で約4頁半にわたって記述されている。和訳は鄒大同医師の協力を得た。

## 「労証」の和訳（全文）

「労証（註：結核のこと）は、肺に砂のように硬い結節（原文は「粒」）が生じる。外来名は啞吡加（原文は口へん+しんにょう+加）叻

（註：tuberculosis）である。発生部位は左肺または右肺、あるいは左右両肺である。病巣は、右肺が左肺より多く、上部は下部より多い。発病の初期には結節は小さく、肺の本体内にある。次第に癒合して一つの大きな結節となる。しばらくすると、崩壊（原文は潰）して空洞となる。空洞には大小があり、肺全体まで崩壊した症例もある。この疾患は各国にあり、寒冷地域では特に多い。英米両国では、病死者100人のうち30人は結核による。

病原或いは病因は、父母から本疾患に罹患しやすい性質を受け継いだこと、あるいは身体が虚弱で湿気の強いところに住んだり、薄着で冷風に晒されたこと、気温の変化が激しいこと、熱帯の人が寒冷地域に移住したこと、食物が足りないこと、室内の換気が悪く空気が臭濁していること、過労あるいは過剰な性

生活や手淫をすること、女性では多量な生理出血があること、授乳期間が長すぎることである。

男女ともこの疾患に罹患する年齢は、15歳～30歳の間にある。症状は、まず空咳、咯血、次第に息切れ、労作時にさらに呼吸困難となり、倦怠感で元気がなくなって、手足がだるく、極端に痩せる。首は細長くなり、胸郭部が狭くなり、労作すると発汗と下痢をする。食物の消化ができなくなり、不眠になる。脈拍は弱く、細く、速くなる。動悸、痰が多く、咯血し、ときには胸痛がある。声は不明瞭で、ときに失声する。指の末節が大きくなり、爪が彎曲する（註：太鼓パチ指のこと）。医師が手で胸部を打診すると音が低く濁恩であり、聴診すると崩壊した空洞からの排気による音がする。夜には頬骨（註：原文は「顴」）は鮮紅となり、早起き、寝汗、舌苔の先は白く後部は赤くなる。

数年あるいは半年から1年で死亡するが、3、4年で死亡する者もある。死の前には、下痢や発汗、さらに痩せ、髪毛が脱落、足が浮腫み、歯肉が腐爛して白泡を生じる。発熱し、痰はさらに粘稠となり膿を混じる。手足は熱く、脈拍はさらに微弱で速くなる。これは、死の兆候である。

剖検では、肺に結核による多数の結節とそれらが癒合した大きな結節がみられる。黄色となったもの（註：乾酪壊死病巣のこと）は肺が崩壊し（原文は「潰爛」）空洞を形成し、瘡瘍と同じ状態である。気管（原文は「総気管」）の声を出す部位の潰爛によって声が出なくなる者もいる。大腸と小腸の潰爛によって通常より白くなるものもある。肝臓の血液

が肺に入れず、肝臓が普通より腫大するものもある。ときに肺と肋骨が癒着するものをみるが、胸膜に及んだためである。それ故、啣吡加（原文は口へん+しんにょう+加）叻（註：tuberculosis）は肺だけではない。小児の栄養不良のように腹部が膨満して、手足が痩せるのは、大腸と小腸の粘膜（註：原文は「皮膜」）に結核が発生し、飲食の栄養分が血管（原文は「液管」）から吸収できないことによる。食べたものは多くても満腹感がない。しかも、この疾患はヒトだけでなく、動物では湿気の強いところに居て、活動しないと、内臓に啣吡加（原文は口へん+しんにょう+加）叻（註：tuberculosis）を発生する（サルにはその病気で死ぬものが最も多い）。中国（原文は「中土」）の婦人には纏足の習慣があり、行動が不便のために体質が虚弱となって、それが原因で結核に罹患した人をよく見る。また、鉄器の職工で、昔、空気中を飛ぶ埃を肺に吸入して、肺が腐爛する者が多い。まず、肺に硬い粒が生じて、労病（註：結核）を発症することが多い。

労証（註：結核）になったら、およそ良い治療法はない。ただ病気になる前だけ（註：予防のこと）である。その人に羸瘦、虚弱、咳嗽、息切れが見られ、あるいは父母がこの疾患にかかった履歴がある場合は、即、結核の徴候として注意すべきである。早急に病気の原因を診察し、生活習慣を直し、湿気の強い所を避け、過労を避け、心労や怒りをせず、重いものを持たず、過剰な性生活と手淫をしないこと。その代わりに、楽な散歩や観光などで体を癒し、他の所へ移住し、環境を変えること。住居では部屋の窓を開けて風通しを良

くし、綿のチョッキ（俗にいう背心、いわゆる袖なしの短い服）を着て、胸部と背部の保温に心がける。頻繁に両腕を開いて運動し胸部を開いて、呼吸を深くする。さらに、お酢の水で前胸部と上腹部を洗い、布で摩擦して、皮膚を熱くする。

内服薬では、およそ去痰、止血、汗止め（原文は「斂汗」）、下痢止めによって、体を安静にすることを主とする。劇しい咳にはトコン散アヘン酒（原文は「乙（原文は口へん+乙）嚙略散鴉片酒」）が繁用される。あるいは、まず催吐剤で痰を除き、汗が多い場合は斂鉛散3、4厘と明礬4、5厘を使い、収斂止汗の効用がある。下痢には胆礬2厘、アヘン2、3厘、水1両、1日2、3銭を服用し、2日間で完服することで下痢止めができる。胸痛には斑蝥膏を貼る。顔と手足の熱感には頻繁に温水に浸かって洗う（図1）。

### 現代医学からみた『内科新説』の結核

『内科新説』に書かれた結核の病理所見や臨床所見は、かなり正確である。黄色となった結節（乾酪壊死巣）の崩壊によって空洞が生じることや、喉頭結核、腸結核とおもわれる記述や、患者の死に至るまでの臨床所見や徴候の記述は、今日でも通じるものである。また、珪肺結核を示唆する記述も興味深い。

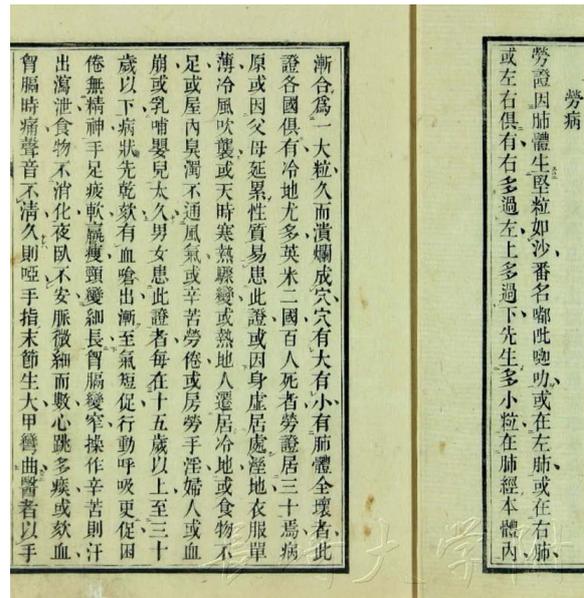


図1 『内科新説』における労病（結核）の記述（一部）

19世紀の結核の臨床と病理が、ウィルヒョウ（Rudolf Ludwig Karl Virchow, 1821～1902年）が活躍した時代の前にも、すでに一定のレベルにあったことを物語っている。

興味深いことは、ホブソンが、結核が世界各国にあることや英米両国の死亡原因に言及していることである。母国を離れて久しいホブソンが、最近の英米の医学知識を得ていたことが知られる。「英米両国では、病死者100人のうち30人は結核による」という、当時の欧米における結核の蔓延が、極めて深刻であったことを記載している。

しかし、ホブソンの記述からは、結核を感

#### 【註】

乙（原文は口へん+乙）嚙略散鴉片酒：乙嚙略散鴉はipecac（トコン、吐根）の当て字。トコンはアカネ科トコンの根を乾燥させた生薬で、催吐、去痰、アメーバ赤痢の治療に用いられる。アヘンとの合剤は、現在でもドーフル散（アヘン・トコン散、武田製薬）として、止瀉、鎮静、鎮痙、鎮痛および鎮咳作用をもつ去痰薬として用いられている。

中国の古重量単位：1銭は約3g、1銭=10分、1分=10厘

染症とする認識はうかがわれない。父母の結核既往も体質と理解している。「結核体質説」は当時の西欧医学界の理解であった。『内科新説』から7年後の1865年、フランスの軍医 ヴィレミン (Jean-A Villemin, 1827~1892年) が、結核をうつす動物実験 (ヒトからウサギ, ウシからウサギ, ウサギからウサギ) から、「結核感染説」を発表したが、顧みられることはなかった (フランス科学アカデミーは、1893年、彼の没後に第1回The Prix Leconte賞を授与した)。「結核体質論」に決着をつけたのは、ドイツのローベルト・コッホによる結核菌の発見 (1882年) であった。

『内科新説』が書かれた1858年は、コッホの結核菌発見の24年前のことである。

「労証になったら、およそ良い治療法はない。」と、『内科新説』では治療に関しては匙を投げている。治療に関する記述は、去痰薬や下痢止めなど対症療法にとどまるが、

「過労を避け」、「住居では部屋の窓を開けて風通しを良くし」など、後の大気・安静・栄養療法につながる環境や安静の重要性が説かれている。セルマン・ワクスマン (Selman Abraham Waksman, 1888~1973年) によって、ストレプトマイシンが発見 (1944年) され、化学療法が幕を開けるには、さらに80年以上もの時を要した。

利益相反：なし。

(完)

掲載日2018年3月16日

© Shoji Kudoh. 本論文の複製権, 翻訳権, 上映権, 譲渡権, 貸与権, 公衆送信権 (送信可能化権を含む) は弊社に帰属し, それらの利用ならびに許諾等の管理は弊社が行います。